

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

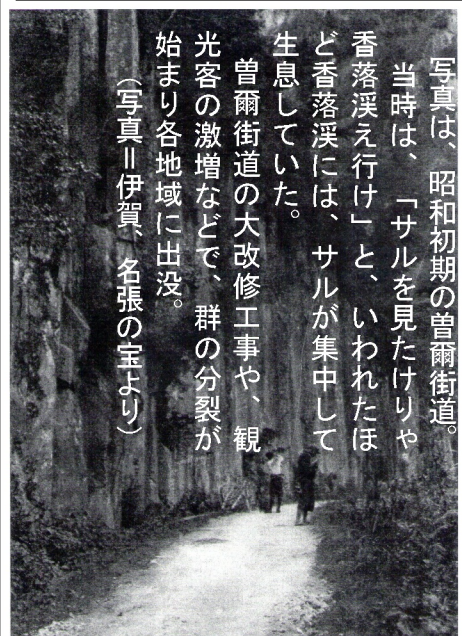
獣害の背景にあるもの その1

いま日本の農業は様々な課題を抱えています。その一つに様々な野生動物による農・林業被害があります。獣害は、人類が食料を狩猟・採集から本格的な農耕に転じた頃からの悩みの種で、その戦いの歴史は、縄文時代に遡ることができません。江戸時代前半には、全国的に人口増加で大規模な農耕地が開拓され、野生動物との軋轢が激しくなった時期もあつたが、一種たりとも絶滅に追い込んだことはありませんでした。明治から大正にかけては、村田銃の開発で乱獲が進み、シカ・イノシシの絶滅が危惧されたことがありました。政府は、明治25年「狩猟規則」を制定し、野生鳥獣の乱獲の防止を図っています。狩猟規正は、大正、昭和と改訂を重ねながら、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」



昔懐かしい棚田風景。度重なる獣害で農家の耕作意欲が喪失し既に、このような面影はない。獣害対策は、先ず、棚田の再生から。

(写真＝朝日ジャーナルより)



写真は、昭和初期の曾爾街道。当時は、「サルを見たけりや香落溪え行け」と、いわれたほど香落溪には、サルが集中して生息していた。曾爾街道の大改修工事や、観光の激増などで、群の分裂が始まり各地域に出没。(写真＝伊賀、名張の宝より)



いま、日本林業は衰退し、若者の林業離れで山林の荒廃が深刻化している。林業は環境とは密接な関係にあり、林業の衰退が獣害を助長していると言っても過言ではない。(写真＝朝日ジャーナルより)



このダム完成により、長年棲み慣れた生き物たちの棲家は水没した。青蓮寺湖、工事着手当時の風景。(写真＝伊賀100年より)



戦後の拡大造林政策により、広葉樹林を伐採して杉や檜の人工林が広がった。写真は、伐採された大量の広葉樹。(写真＝朝日ジャーナルより)



暖冬傾向によって生息域が拡大し、シカやイノシシなど特定の野生鳥獣が著しく個体数を増加させています。さらに近年の中山間地域の過疎化、高齢化で耕作放棄地が拡大し、中山間地域は、野生動物の生息しやすい環境になり、野生動物本来の生息域と人間の境

は既に忘れていますが、名張市「〇〇が丘」「〇〇台」は、元は緑豊かな林野で野生動物の生活の場だったので。このような大規模な団地造成は、生態系を破壊し、さらに、野生鳥獣との棲み分け、共存のシステムまでも破壊しています。また、野生動物の生息地を根こそぎ奪うことにもつながり、中山間地域の獣害深刻化に、大きく関わりがあるものと考えます。高齢化や過疎化が進む中山間地域では、野生鳥獣による農林被害はさらに深刻で、生産者の耕作意欲喪失や耕作放棄地の拡大の大きな要因となっています。これにより、山間地域の活力の減退に対する危惧は、年々大きくなっています。ダムについても同じことがいえます。日本中のダムの数は、3000基。名張市には青蓮寺ダムと比奈知湖。隣接する奈良県に室生ダムがあります。全国的に都市近郊の街地化工事が終わるのが平成初期。農山村で野生動物の被害問題が、全国的に深刻になり始めたのが、20年程前からで、全国的な市街地化による自然破壊が、大きく影響しています。

サル追い払いにドローン

神奈川県では、サルを追いかけた機能をつけたドローン開発に着手したとのこと。先日早朝、CBCテレビ「あさチャン」が放映。

現在、名張地方では一部のサルに発信機をつけ、それを受信し、おおまかな位置情報を把握して、地元自治体や住民らが花火などで、脅して追い払っているというのが現状。ドローンに着目したと驚きで、全国的にも前例がない取り組みだと思えます。

テレビ映像では、ドローンが飛んでいくと山にいた集団のサルは、一目散に山の奥へと逃込んで行きました。

ドローンでの撃退のイメージは、まず群れの一部のサルに、「GPS」を内蔵した発信機をつけて山に戻し、発信する信号を、待機しているドローンがキャッチして飛び立ち、群れの位置を把握。群れが移動しても自動的に追いつき、人間に場所を知らせるというシステム。最終的には、ドローン自体がサルの群れに接近して音や光で脅かし、山へ追い返す機能も視野に入るといいます。

運用コストの高さが悩みのタネです。今後、

チョット一服 獣肉の雑学



縄文時代は、狩猟・採集の生活で肉食は当たり前であった。弥生時代、農耕が始まるが、奈良時代は内臓も食し、隅々の部位まで利用していた。肉食が問題になるのは、仏教伝来以降である。日本には、神道と仏教の二大宗教がある。天武天皇が仏教伝来後、その戒律に従い、牛・馬・犬・猿・鶏の五種類の肉食禁止令を公布した。何故か鹿や猪、魚類は、この禁止令には含まれていない。この禁止令の概念は、江戸時代まで引き継がれていった。

一方神道では、肉食は穢れに通じ、この概念が、肉食を拘束していたのだと思われる。肉食禁止令は、その後何度も繰り返し発令されていることを考えると、肉食の習慣は一朝一夕では、改まらなかったのだと考えられる。

時代が変わり江戸時代でも肉食は禁じられていたが、元禄期に発せられた徳川綱吉の「生類憐みの令」がある。綱吉の死後、この令は破棄されるが、

「殺生・肉食は悪く」という概念は庶民に刻み込まれ根付いていた。だが、実際には庶民は隠れて肉食を行っていた。禁止令にも、狩猟で得た獣肉は良いが家畜を殺した肉は駄目など、片手落ちなところも多々あった。江戸時代の庶民、特に江戸や浪速の町人たちは獣肉の味を忘れられず、密かに肉食を楽しんでいたようである。

それを物語るものに、獣肉を符牒で表す隠語がある。この隠語は、現代も広く使われている。ポタン鍋はその隠語の一つで、猪肉は「ポタン」「山鯨」、馬肉は「サクラ」、鹿肉は「モミジ」、鶏肉は「カシワ」など。ウサギを一羽、二羽と鳥と同じように数えて食したということは、笑えない事実であり、その数え方は現代にも残っている。「ウサギ＝鶏+鷺」？。「薬食い」。薬と称した食方も庶民は考えた。獣肉を食べるために庶民は知恵を絞ったのである。維新後、肉食は貴族にも普及し、明治天皇も食された。当時では、肉食は文明開化の象徴でもあったようだ。

時代が進むにつれ、獣肉（ジビエ）の食文化が、日本でも広まるきざしが見える。

山を忘れたサル 山を裸にするシカ

昔は、サル・シカ・イノシシが害獣トリオでしたが、近年アライグマなど、外来種が加わり多種多様の被害が深刻化しています。

人慣れや、個体数増加などで、野生動物との「距離感」がなくなってきたいます。

特に、近頃のサルは、「里生まれの里育ち」多くなり、山に帰る気はないようです。

近年、名張B群では遊動域が非常に狭く、特定の地域を大きく離

日常的に使うには、機体価格を、各自自治体が運用できるような、価格まで抑える必要があらります。「サル追いドローン」の開発がサロ対策の救世主となることが期待されています。

日常的に使うには、機体価格を、各自自治体が運用できるような、価格まで抑える必要があらります。「サル追いドローン」の開発がサロ対策の救世主となることが期待されています。

日常的に使うには、機体価格を、各自自治体が運用できるような、価格まで抑える必要があらります。「サル追いドローン」の開発がサロ対策の救世主となることが期待されています。



激増し農林被害が深刻です。森林でのシカ被害で重要なことは、生物多様性が大きく低下することです。シカは口の届く範囲の植物は無論、落ち葉すらも食べ尽くし、林床や樹木の根も剥き出しにしてしまい、樹木の枯死や、地面を生育環境とする植物や、落葉層に潜む昆虫類が減少し、生物多様性に大きな影響を及ぼします。

さらに、被害は自然界での食物連鎖にも関わってきます。例えば、野ウサギは、低床に生える、せいぜい50cm程の高さの植物しか食べることができません。落ち葉までシカに食べ尽くされてはウサギは生きていきません。野ウサギを餌としている肉食動物・猛禽類にも大きく影響します。

シカ被害は、自然環境に大きな影響を及ぼしています。

農業被害では、本来、シカは緑草の生えた水田やその周辺などが最も好む場所です。田植え後の稲、麦の新芽や穂、野菜の苗、果樹の樹皮など、何でも食べるシカの被害は、農作物全般にわたります。植物質のものなら大抵は食べます。

茶の葉など今まで食べなかつたものでも、味を覚えると食べるようになります。

生息密度が高い地域では適正な捕獲が必要で、捕獲したシカは、地域の資源として有効活用すること、地域の活性化にもつながります。

増えすぎたシカの適正な捕獲は、野生動物の保護にもつながるといふことを、念のために申しあげておきます。

写真II広がるシカの食痕。

赤目町龍神山で。

サルの出没状況 名張A・B群

3月のサルの動向、A群は、特徴的な行動を示すことなく、餌不足のため、餌の豊富な場所に集まり活動しています。

上比奈知・奈垣・つつじが丘の周辺を遊動していますが、時折つつじが丘や集落内に侵入して民家の屋根に飛び移ったりするなど生活環境被害も出ています。

また、畑・家庭菜園など農作物にも一部被害が出ています。

B群は、先月に続き伊賀竜口地区での長期滞在が続いています。地区では追払いの話しも出ています。

また、頭数が少ないので、山中での餌で足りているのか、作物被害は比較的少ないです。A・B群共に、厳しい寒さと雪の影響もあり、日当たりの良い温暖な山の斜面や民家の屋根で見かけることが多くなっています。

名張市農林資源室では、伊賀竜口に、サル捕獲檻を仕掛けて捕獲に努めております。

ご近所の皆様、ご協力のおかげで、ご協力願ひ申し上げます。

指導員報告

- 名張鳥獣害問題連絡会 発行部数
- 錦生地区：100部
 - 赤目地区：200部
 - 箕輪地区：70部
 - ひなち・富貴ヶ丘：30部
 - つつじが丘：430部
 - 市民センター：100部 (10地区)
 - 名張市議会：20部
 - 名張市役所：20部

